



子どもたちの「できない」に ていねいに寄り添う

竹内由美

日々子どもたちと過ごす中で、また、いろいろな学校の実情を耳にする中で、子どもや教師の「生きづらさ」という言葉が実感を伴って響くようになってきています。子どもたちの発達課題や生活課題は多様化し、その深刻さも増しています。

体を思い切り動かして大勢で遊ぶ、何かをできるようになるまで取り組む、それを誰かに共感してもらえる…。さまざまな経験が十分でなく、子どもたちは今一つ、自分に自信が持てずについて、すべてに関して積極的になれない姿を見せています。また、学校でも、子どもたちはいろいろなことを「できないまま」にされ、学年が進むにつれてその深刻さは増していきます。上から下りてきた年間指導計画に沿って授業を進め、子どもたちができていてもできないままでも、予定の時間になれば次の単元に進んでしまう、ということが身近でどんどん進んでいる実態を見て、今、自分にできることは何かを、いつも考えています。

そんな中で、体育で何ができるか。

できなかったことが「できる」ようになる、という体験は子どもたちの心を大きく動かしします。子どもたちができるように

なった姿は教師の姿勢さえも大きく変えていきます。もちろん、保護者の気持ちも大きくつかむことにつながっていくことを多くの教師は体験したことがあると思います。それぞれの運動文化が持つ価値に触れ、自分の体を通して「できる」ようになったことを実感することで、子どもたちの意識を少しずつ変えていきたいと思ったとき、「すべての子どもたちに“できる”ことを保障する授業」が、とても大切だと改めて感じるようになりました。

誰かの「できる」から始まり、「できる」ポイントをみんなで考え合い、それを交流してみんなに「できる」ことを保障していく授業。もちろん、「わかる」ということと関わり、教え合うことなしにみんなが「できる」ようにはなりません。「できる」ということの価値を、今一度見直していきたいと考えています。

「できる」ようにしたい、と思って真摯に実践に取り組むことで、授業の中で大切にしなくてはならないことが見えてくるのではないのでしょうか。今号の論考や実践がそれを考えるきっかけになればと思います。

(たけうち ゆみ／埼玉支部)